

瀬戸内晴美

文化服装学院出版局刊

道

随筆＊道

検印廃止 © Harumi Setouchi

定価四五〇円

送料八五円

昭和四十年七月十二日初版発行

著者／瀬戸内晴美

発行者／大沼淳

発行所／文化服装学院出版局

東京都渋谷区代々木三の二二

振替／東京一九五六七〇番

印刷所／株式会社三陽社＊株式会社精興社

製本所／大口製本印刷株式会社

製函所／加藤製函株式会社

目次

旅路

梅のきもの

ふるさとのひな祭り

港のある街

流れのほとり

背中の顔

ゆかた

見出される時

花の旅情

パリへ

きもの

見知らぬ人へ

山茶花と指

嵯峨野の道

秋風ときもの

時計

かんざし

119 116 114 112 110 102 93 84 76 67 58 50 42 33 25 16 7

ふろ

七色のバラ

「実は……」

墓の顔

ある文学碑

妖しい生物

蔵の中

おしろいの中から

女作者の死

黒門市場のうどん

見るということ

忘れるということ

逢うということ

捨てる

過ぎたるは

私の小説作法

122 125 129 134 139 144 149 154 158 160 164 166 169 172 174 179

私の書きたい女

執念の顔

これがポイント

かの子の歌

上野界限

食魔

一平全集の語るもの

女流作家と文学碑

一期一会

死に様

道

母ときもの

故里と酒

わかれ

幻の大阪

春寧

179 182 186 189 193 196 199 202 205 209 212 215 219 223 227 232

装画
装丁

小林今日子
小堀神風

隨
筆
道

旅 路

いつのころから、これほど旅が好きになったのだろうか。

旅に憧れるということがある。私の旅情は、もはや憧れるというやさしい舌ざわりのいい段階ではなく、どうやら、憑かれていゝらしい。

ひと月、東京を離れないでいると、頭に、鉄の輪でもはめこんだように重苦しく、空氣が稀薄になつたような胸苦しさを感じてくる。

十年近い歲月、私はひとつの恋に囚われていた。その間、私はほとんど旅に出ることがなかった。その人は、私とばかりいつも暮らしてくれる人ではなかったのに、私は、彼が私の部屋にいない時——それは彼の妻と娘の所に帰っている時だったけれど——でさえ、私は、私たちの部屋を留守にして、旅に出ようとは考えたこともなかった。

彼の留守を守るといふ殊勝な気持がはつきりあったとは思えない。けれども、もし、予定より早く、何かの都合で彼が来ないともかぎらないという期待がいつも心のどこかにひそんでいて、私は部屋を空っぽにする気になれなかった。

そのころ、旅に出なくとも、私の心はいつでも旅情に似た思いでみたされていたようだ。旅情と恋の思いは似ているからだろうか。

恋の生きている時、どんなに愛しい、どれほど多くの時間を共有し、いかに喜憂をわけあったも、相手の中には、やはり未知な、青い地図が残されているような気がする。まだふみこんだことのないその地図の不思議さに魅せられ、そこにかくされているはずの森や、湖に憧れている時、いっそう恋の色どりは美しく華やかな時であるのかもしれない。

彼とのわかれを思いはじめたところから、私はしきりに旅に出るようになった。

見知らぬ街に入っても、はじめての山や川に逢っても、私の目には風景は無色で、まだ描かれないカンバスのようにむなしく白くひろがっているだけであった。

列車のすみや、バスのすみで、私はどこまでいっても、じぶんの恋をみつめ、男のおもかげと話していた。

私の旅に、風景がいろどりをもって来、山や川が、それぞれの表情をみせはじめたのは、その

恋にわかれ、男との暮らしが過去のものとなって、一年も過ぎてからだった。

するといつのまにか、私は旅にいる時、いちばん私らしく心が落ちつき、のびのびふるまっている自分に気づきはじめていた。

十年近く、あれほど「時間」がなかったのに、いつでも私のまわりには、出発を待っている無限の時間で、にぎやかにみたされていた。気がつく、あらゆる未知の地図が私を根気よく招きつけていてくれた。

今、机の前にすわりこみ、ペンを走らせていた手をとめると、私はそそくさと立ち上がり、そのままの着物の裾を合わせ直し、帯を結び直す。ちょっとそこまで買い物にいくような身軽さで、むぞうさに立ち上がると、小さく折りたためるカバンを一つだけさげ、さっさと家の門を出る。後にひかれる気がかりもなく、そんな私を呼びとめてくれる声もない。

自由というものは、なんと高価な孤独であがなわなければならないものかをつくづく考えさせられる。

なじみのない田舎町の古めかしい宿の重い綿のつまったふとんや、遠い都会の病室のような白壁に囲まれたホテルのベッドの軽い毛布の中に身を横たえる時、まるで土にからだをこすりつけ、温かな雑草におおわれているような、不思議な安らぎにみたされ、深い眠りの中に沈みこんでい

くことができる。

朝、目がさめた瞬間、目の上にある天井のなじみのない表情を見上げ、じぶんのいる位置をたしかめ、納得するまでの数秒間の頼りなさだけは、いつまでたっても慣れることのない不安な、心細さだ。それすら、私は、いつのまにか、肌なつかしい感懐として手なづけはじめている。

劫初のたった一人の人間が、混沌の中からぼかりとこの世に浮かび出た時の、さびしさ、おそろしさ、物恋しさとは、もしかしたら、こんな旅のかり寝の朝の、ひとりの目覚めのようなものではなかっただろうかなど、ゆっくり部屋を見まわすのだ。

放浪の旅から帰ってくると、東京の郊外の、まだ武蔵野のおもかげの残っている森かげの、小さな小さな私の家までが、ふと、旅先のかりの宿のようなよそよそしい表情に見えることがある。オリンピック道路の工事が近くではじまって以来、旅から帰るたび、まるで見知らぬ町に迷いこんだように、風景は面変わりしているのである。見覚えのある家はとりこわされ、知らないガソリンスタンドが建ち、目じるしのポストさえ思わぬ位置に移っていたりする。

家の周囲の白いボールを並べたようだったキャベツ畑は、ほんの短い留守の間にも、緑の色を深め、葉脈を猛々しく太らせ、せいっぱいからだを広げ天を仰いでいる。

じぶんの部屋にすわり、机に向かい、親しい本に取り囲まれ、私用の湯飲みを両手で抱きなが

ら、わが家のお茶をすすする。その時、はじめて家に帰ったという気持ちに落ち着くはずなのに、もう私の思いは、通ってきた旅の町々の、川や路を丹念にたどりなおしているのだった。

名所とか名勝とかいわれる風景に私ははじめない。

雨やどりした軒先で、ふと格子戸ごしに聞いたその家の人たちの、何気ない暮らしの嘆きや、のどかな笑い声……車の中から目にしみた町角の果物屋の宝石のように艶めいたみどりのぶどうの房の色……焼け残った寺町の崩れた築地の土壁の肌に根をおろし、せいっぱいに咲いていた雑草の小さな花……町角で、人目も忘れて涙をあふれさせ、男にすがっていた女の薄い肩……何も、わざわざ、遠い旅に出かけなくても、私の東京の日常の生活の中に、始終、目にふれ、耳にしているそれらの変わりもないそんなきれぎれの影像を、私はひとつひとつ、記憶の中から拾いあげながら、なでさするように、追憶する。

そして旅愁は、じぶんの部屋の、机の前にすわっていても、霧のようにわきおこることをさとするのだ。

人生の半ば以上も、生きて来た今になって、ようやく、人の生とは、逢って別れることの繰り返えしにすぎないということに気づく。

旅がひたすら私を招き、旅情がひとしお私の身にしみるのは、旅で出会うすべての風景や人に

は、おとずれるわかれを前提として接するためではないかと思う。

何度繰り返しても、まだその迷いからぬけきることができない人恋しさや、肌なつかしさをじぶんのなかに見出す時、私はほとんど絶望的になって旅に出かけるようだ。

わかれが来ることを知っていて、なぜ逢いたがるのか、性こりもない煩惱の深さは、私ひとりだけの負い目なのだろうか。

阿波の徳島を故郷に育った私は、物心ついたころ、よく巡礼の鈴の音を聞いた。南国の早い春のおとずれとともに、その鈴の音は巷のあちこちの曲り角からわき出るように近づいてくる。同行二人のすげ笠をかぶった巡礼たちは、だれもが、のどかなお四国めぐりの法悦にひたされた表情ではなく、見るからに業病や、絶望を背負った悲惨な暗い目つきの人々が多かった。

「おへんろさん」は子どもの私には、その背にいかにも明るい陽光を背負い、あざやかな菜の花畑を背景にしている、物悲しい、さびしい、どこかこわい人の姿に映った。

「おへんろにつれていってもらう」

というおとなのおどかしが、充分効果をもってびたっと泣きやんだものだ。そのくせ、おへんろさんの鈴の音と、地に引く影がなつかしく、町角でいつまでも見送っていた。

これというあてもない気ままな旅をさまよっている時、ふっと、幼い時聞いたあの鈴音を思

いおこし、思わず、後ろをふりかえり、じぶんの影を見つめ直す時がある。そんな時、私は、昔の人がふみかため、今は忘れられかけている古い街道や廢道を、好んでさがしだし、歩いてゆきたくなる。

車の洪水の国道何々線と呼ばれる美しい広い道路の横に、ひっそりとつづいていくそれらの旧道は、どの町も、申しあわせたように同じようなけだるい表情をたたえている。向かいの家の中の声が聞こえそうなせまい道をはさんで軒の低い格子戸の家が並び、思いがけない軒下に、風雪に字づらのかすんだ道路標の石などが立っている。

軒の下に、ささやかな流れがあり、そこで物を洗う老婆の顔の表情まで、一つの面をかぶりあっているように、だれもみんな似かよっている。それぞれの嘆きや、憧れをこめて、昔の人間が一步一步ふみかためた古い道は、路傍の石ころひとつまで、なにかつぶやいているようで、目にしてみてくる。

物を煮る匂いが、家々の格子の間から、ふっと夕闇に流れたす時、家に愛着がなく、家族らしい家族のない私まで、思わず足をとめ、明るい灯の下の団らんの図を描かずにいられないのは、何に對する郷愁なのだろうか。

物を煮る匂い……物を焼く匂い……そしてふっと耳をかすめる台所の水音や皿の音……その中

に浸っている時には、なんの感興もそらないそれらのささやかな気配や物音が、旅の途上では、思いがけない激しさで、心にからみついてくるのも旅情の不思議のひとつだろうか。

それと同じ意味で、人の家の灯のもれる窓が、このうえなく暖かく瞳に映るのも、旅の途上のように思われる。

灯の少なかった昔の旅人が、はるかなさびしい旅路の果てに、たったひとつの灯をみつけた時の深い喜びと安堵が、私たちの血の中に、今もかくれ住んでいたのだろうか。

旅に出たく、それがかなわないほこりっぽい忙しい日々には、私は旅の町角で求めてきた、ささやかな品物を机に並べたり、手のひらにのせて心を慰める。

名物と呼ばれるものは、名所名勝と同じあつかましさと無粋さを持っていて、私には魅力がない。薄暗い雪国の、深いひさしのびた店先で、選びまよった手織りの盲縞の半てんや、鈍い音をたてる素朴な泥の鈴や、あどけない原色の色どりの鳩笛など、私の旅の喜憂をわけもってくれるささやかな道づれになってくれたそれら……。

あるいは、また、どの町にも必ずある、小さな古道具屋で、さがし出してきた、古風なかんざしや蒔絵のはげた小さな櫛……。

足袋の小はぜのはずれたのに気づき、身をかがめた路上で、思わず拾いあげずにいられなかつ